「人間発達学」の創造をめざして

加藤義信（人間発達学研究科長）

愛知県立大学大学院人間発達学研究科の研究紀要『人間発達学研究』創刊号をみなさまのお手元にお届けします。昨年４月，新しい研究科が設置認可され，８名の院生を迎え入れてからほぼ１年が経ちましたが，振り返ってみれば，ここに辿りつくまでは茨の道であったと言っても過言ではありません。

愛知県立大学は1951年の短大創設から数えて60年近くの歴史を有し，その教育研究の水準は地域社会から高く評価されてきました。しかし，こと大学院設置に関しては，県内の他の国立大学，市立大学，大規模私立大学に大きく後れをとり，初めての大学院・国際文化研究科の設置にこぎ着けたのはやっと1998年の長久手移転時のことでした。ただ，残念ながら，このとき教育・福祉系の学科に対応する大学院設置が同時に実現することはありませんでした。その後は愛知県の財政悪化の時期と重なったこともあって，私たちの強い願いにもかかわらず，学内で唯一，教育・福祉系学科だけが大学院をもたないという変則状態が世紀の変わったあとも長らく続くことになります。転機となったのは，2006年３月に愛知県が県立３大学の今後の改革の方向を示すために発表した「愛知県大学改革基本計画」でした。このとき初めて，愛知県立大学全体の教育研究をいっそう高度化する方針の一環として，博士課程を含む教育・福祉系大学院の設置計画案が文書に謳われることになります。そして，この計画案に沿って，2009年４月にやっと人間発達学研究科修士課程が発足することになったわけです。この設置に至る小史を見ても，私たちの新しい研究科が，10年余に及ぶ私たちの悲願の賜であることがおわかりいただけるかと思います。だからこそ，発足後のこの１年間は教員スタッフ全員が，新研究科をどうしたら大切に大きく育てていけるかに心を砕いた１年でした。

私たちの研究科には，「人間発達学」という新しい名称が冠されています。それは，母体となる教育系と福祉系の学問分野の協同によって，人間の発達と尊厳にかかわる新しい知の創造を目指すという遠大な目標を私たちが掲げているからです。「発達（development）」とは，確かに，個々の人間の誕生から死までの時間に伴う変化を指す語ですが，しかし，それを個人内現象として捉えることはできません。人間は生まれたときから社会的存在であって，家庭や地域の人間関係，長じては学校教育や社会の制度や経済活動に支えられてはじめてその発達的可能性を現実化することができます。したがって，現代の私たちの社会の中で生じている“発達の危機”と呼び得る現象に真正面から向き合い，一人一人の発達を十全に保障する理論的，実践的な知見を集積し発信するためには，まさに教育と福祉にかかわる諸科学の協同が不可欠です。

私たちの新しい研究科は，まさにこうした野心的な試みを，地域の教育・福祉諸機関と連携して進めていく所存です。そのために，来年2011年４月には，さらに博士後期課程の設置をめざして現在，鋭意努力中です。

この『人間発達学研究』が，研究科の目指す目的達成のための有力な武器となっていっそう発展していくよう，みなさまの温かいご支援を心よりお願い申し上げます。